

京極読書新聞 <第36号>

発行日 平成24年 8月 1日(水)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2012

第3回

夏休みの空には入道雲が。海に、山に。北海道
の短い夏を楽しもう！ <編集部>

黄金崎樹菜さん(1年生) 渡辺夢那さん(1年生) 「広島 昭和20年8月6日」

—— 中学校の新しい生活、どうですか？

黄金崎・渡辺

クラブ活動が楽しいです。二人とも音楽部(合唱)で
がんばっています。

—— そうだねえ。小学校の時から合唱やっていたもん
ね。ところで、黄金崎さん。この「広島昭和20年8月
6日」を読書感想文でとりあげようと思ったのは、去
年の青少年広島視察研修(*)の前でしょうか。

黄金崎 後です。広島の研修で受けたショックにいちばん近
い本ということで、この本を選びました。

—— 広島の前爆に対する切口が新しい…と感じました
ね。昔は前爆の悲惨さ、残酷さを強調する本が多
かったと思うのですが、この本は、前爆投下のその
日その時刻までの一家族の生活を追うことによっ
て、逆に、前爆投下がもたらしたことの恐ろしさを伝
えようとしている。

渡辺 私が広島視察研修で感じたことも似ています。それ
まで、普通に一生懸命がんばっていた広島の人た
ちの生活が、前爆投下で一気にふき飛ばされてし
まったんだということを考えた時、心底恐ろしくなり
ました。

黄金崎 広島の前爆投下の話は怖かった。夏の暑い日に聞
いた話だったのですが、とても寒く感じました。原子

爆弾に「トルボーイ」というふざけた呼び名をつける
戦争の残酷さがたまりませんでした。

—— 語り部の矢島年明さん。その矢島さんの話も聞か
ないでケータイ・メールを打っている修学旅行の男子
学生にいらだって、矢島さんは家族(三姉妹と次男
の年明)の話を始める…という導入がちょっと興味
深かった。今ならこんな学生もいるんだろうなと思
いました。

黄金崎 私も、どうして語り部の人たちはこんな人たちにまで
話をしようとするのだろうと不思議でした。自分なりに
考えてみて、それは、核兵器の恐ろしさを知らない、
戦争の恐ろしさを知らない人たちだからこそ、語り部
の人たちは話をするのだと思うのです。そうしないと
世界中から戦争がなくならない。

渡辺 研修から帰ってきて、どうして米
国は日本に前爆を落としたいの
だろうか、どんな理由で広島に前
爆投下をしたのか、知りたいと思
いました。



* 京極町は、平成7年9月に「非核・平和の町宣言」をしたこ
とをきっかけに、平成8年より広島市の平和祈念式典に小
中学生を派遣しています。昨年も8月5日から7日までの3
日間、今回の黄金崎さん、渡辺さん、第1回インタビューの
船場さんを含む小・中学生7名が平和の大切さ、命の尊さ
を学ぶことができました。今回のインタビューでは、「広報きょうご
く」平成23年9月号に掲載された三人の視察報告も参考
にさせていただきました。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2, 3ページ目に続きます

京中生にインタビュー2012 第3回 1ページ目からの続きです

——— この本、テレビドラマにもなっているみたいで、この表紙に映っている「産業奨励館」(後の原爆ドーム)はドラマのセットの写真なんですか？

黄金崎 実際の原爆ドームは鉄骨がむき出しで、しかもその鉄骨がぐにやっと曲がっている不気味な姿でした。

渡辺 千羽鶴を置きに行った平和祈念公園に子どもの像

がありました。まだ何年も生きていないのに、原爆で亡くなった子どもがいると思うと、とても悲しい気持ちになりました。

——— 広島原爆に加えて、福島原発事故という歴史的現実も背負ってしまった私たちは、真剣に平和というものを考えなければならないと思います。

森口紗江さん(3年生)「夢はきつとかなう」 三谷優樺さん(3年生)「13歳のシーズン」

——— 「夢はきつとかなう」を読んでいて、なーんか調子が変わだと思っていたんだけど、この本、高橋尚子2008年北京オリンピックへ向けての復活！という本だったんですね。

森口 ロンドン・オリンピックの年だけに、余計、変な感じになるかもしれませんね。

——— 森口さんの感想文の巧いところは、その「北京オリンピックに向けて」というところに焦点をあてないで、「子ども時代、学校時代の高橋尚子」に注目したところだと思います。これなら、話が古びない。

森口 学校時代の高橋さんには感じるものがいっぱいありました。たとえば、走ることが単純に楽しかった中学生の高橋さんが、次第に、勝負に勝つとか、トップに立つとかの競争の世界に入ってゆく時の戸惑いなども正直に書かれていて共感しました。そんな中でも、走ることの楽しさを忘れない高橋さんの生き方は、私にいろいろなヒントを与えてくれたと思います。

——— 「体力作りに、遊びにおいて」と声をかけてくれたスキーの先生の話も感想文にありましたね。
森口 中学一年のことです。私は六歳の時からクロスカントリスキーを滑っていました。初めの頃は、スキーの楽しさだけだったのですが、小学校の高学年になるにつれて「勝負に勝つ」というような意識が頭の中を占めるようになって。それで、辛くなって六年の冬でスキーをやめてしまいました。そんな中学一年の冬に、かけられた言葉なんです。この本を読んでい

て、あの時の言葉を思い出しました。

——— さて、最優秀賞に続いて、優秀賞の「13歳のシーズン」です。あさのあつこさんが、こういう「学園もの」を書いていたというのびつくりだったけど、こういう「学園もの」が今の時代にも生き残っていることにけっこうびっくりしました。

三谷 感想文用に何冊か考えたんですけど、この本がいちばん気に入りました。

——— 「理科室の人体模型」とか、「保健室での応急処置」とか、古式ゆかしい学園もの定番のラッシュで、思わずにつっこりしてしまいましたよ。

三谷 全性格のちがう四人が一つのことに一生懸命に取り組む、仲良くなっていく姿には感動しました。私も、宿泊研修などで普段しゃべらない友達と一緒にの班になったりすることがあるのですが、一つの目標にみんなで行き届くことによって深い絆が生まれたりする経験は何ものにも代えがたいものです。

——— 東日本大震災のことにもふれられていましたね。

三谷 この一年間は、「今生きている」ことの意味をみんなが考えたと思います。家族や友達がいるということ。一人じゃ何もできないこと。みんなで協力すること、いろいろなことを考えさせられました。

——— そうだねえ。今はその意味がわからないけれど、この時代にこの本を読んでいたということには、なにか意味があるのだと思いたいですね。「今生きている」って、そういうことだから。



お詫びと訂正

第六回「余談 <平清盛>」の記述に誤記がありました。お詫びして訂正いたします。

(誤) 「源太産衣(げんだうぶぎぬ)」「膝丸」という二領の鎧を
(正) 「源太産衣(げんだうぶぎぬ)」「膝丸」という鎧と太刀を

4ページより、余談「平清盛」(7)



左: 渡辺夢那さん(1年生)
右: 黄金崎樹菜さん(1年生)
「広島 昭和20年8月6日」 遊川 和彦著／汐文社



左: 森口紗江さん(3年生)
「夢はきつとかなう」 黒井 克行著／学研
右: 三谷優樺さん(3年生)
「13歳のシーズン」 あさのあつこ著／光文社

余談「平清盛」(7)

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一(むらやま・こういち)

7月8日放映の第27回は、“平治の乱(平治元・1159年)”のクライマックス・シーンでした。

平治の乱は、きわめて上昇指向が強い藤原信頼という公家さんが、保元の乱後の恩賞に不満を持つ源義朝を味方に引き入れ、ライバルの信西入道を殺害し、後白河上皇・二条天皇を幽閉し、政治の実権を握ろうとして起こした、一種のクーデターです。この企ては成功しますが、二条天皇が脱出に成功し六波羅の清盛邸に入り(のち後白河院も脱出)、朝敵追討を清盛に命じます。この時点で平家一門は“官軍”として内裏(皇居)を不法占拠する信頼、義朝勢を攻撃する合戦へと至ります。と、まあ、それはさておき、大内裏待賢門から突入する清盛の嫡男重盛(23歳)と、これを守る悪源太の異名をとる義朝の長男(嫡男は三男頼朝)源義平(19歳)との一騎討ちは、『平家物語』でも最も有名な場面です。源平を代表する若武者二騎が御所広庭の“左近の桜”、“右近の橘”の周囲を追いつ追われつ駆けめぐるこの名場面は、残念ながらドラマにはありませんでした。もっとも、『ドラマ・清盛』は清盛が主人公ですから、重盛と義平の合戦を『平家物語』に則って忠実に描く必要はないかも知れないし、騎馬武者の乱戦シーンがセットでは無理だったのかも知れません。

さて、今回の様々なシーンで気になったのは“鉢巻き”です。しかも、紅(清盛以下平家勢)、白(義朝以下源氏勢)であることが、微笑ましくもなかなか笑える演出でした。紅白はともあれ、私が“鉢巻き”に反応したのは、近藤好和氏の〈(烏帽子に)鉢巻きの使用は鎌倉後期から〉(1)という解説を読んでいたからです。で、数種類の事典・解説書(2)を調べました。その結果、烏帽子鉢巻き姿が一般化するの、だいたい蒙古襲来(文永の役・1274年)頃が妥当ということでした。少なくとも平治の乱の時点では、大将以下全員が烏帽子鉢巻きの上に兜をかぶるという風俗は、まだ見られなかったと思われます。まして標識(旗の色)のように、それぞれお揃いの紅白の鉢巻き姿は、源平を象徴するいでたちということなのでしょうが「うーん、ちょっ

となあ」と感じました。

さらに、終盤では視聴者への大サービスからか、壮絶な清盛VS義朝の対決が展開されました。でも「なんかヘン」なのです。

源平入り乱れての乱戦場面から突然二人のほかは誰もいない川原(多分、鴨川)に向き合うシーンは、まあ、置いてくとしても、源平それぞれの棟梁同士がたった二人で対決することは、この時代の合戦様式からはちょっと考えられません。私闘ならばともかく、この合戦は天皇の命を受けた清盛(官軍)による朝敵義朝(賊軍)に対するれっきとした追討戦なのです。しかも、追討使たる清盛は義朝を討ち取らないばかりか、故意に逃がします。これは重大な命令違反です。だから、二人だけの場面にしなければならないのでしょう。一方、義朝は何と源氏重代の太刀“鬚(ひげ)切り”を、その場に残して去っていきます。こんなことしていいの？ 源満仲以来脈々と源氏嫡流に伝わる太刀を、ですよ。清盛が持ち帰った鬚切りは伊豆への流罪言い渡しの時、頼朝に返されるという設定にまでなっています(7/15放映)。思わず「うーん」と唸ってしまう展開でした(3)。

涙を誘う“男の友情”は分かりますが、思いつき大胆な演出は、少々サービス過剰ではないでしょうか。〔以下次号〕

【注】(1)近藤好和『弓矢と刀剣—中世合戦の実像』

吉川弘文館 PI44

(2)『平家物語大事典』(東京書籍)

『有識故実大辞典』(吉川弘文館)

『図説日本合戦武具事典』(笹間良彦/著・柏書房)

≪いずれも湧学館蔵≫

(3)“鬚切り”に関しては「屋代本『平家物語』〈剣の巻〉」

に詳しい記述があるので、稿を改めて紹介します。

【参考図書】*印は湧学館所蔵

今まで掲げた参考図書と重複するものは除く

『騎兵と歩兵の中世史』(近藤好和/著・吉川弘文館)

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

